

新聞記事における副詞“全然”の被修飾語について

—明治末～昭和戦前期と現在—

新野 直哉

1. はじめに

副詞“全然”については、これまで数多くの研究がある。これまでの研究によって、「「全然」は本来「全然ない」のように否定を伴うべき副詞である」としばしば言われるが、これは、「迷信」であり、明治から昭和戦前にかけては否定をも肯定をも伴って用いられていた」ということは、日本語研究者にとっては常識となったし、社会一般にもある程度知られるようになったと言ってよい。しかし、いまだ残っている問題もある。そのひとつに、「同じ肯定を伴う“全然”の例でも、明治から昭和戦前と今日とでは、被修飾語にどのような違いがあるのか」ということがある。

筆者は以前新野(1997)で、その時点で採集していた明治～昭和戦前期と今日(1994～1996年)の“全然”の用例を対象に、被修飾語について分析・考察を行った。ただその際の調査は、明治～昭和戦前の用例は当時閲覧できた新聞・雑誌の原本・復刻版から、今日の用例は筆者が日常生活の中で遭遇した新聞・雑誌から採集したもので、不十分の観があった。

文学作品においては、尾谷(2006)・岡崎(2008)などで、明治～昭和戦前期と昭和末期あるいは平成期の資料を対象に被修飾語を調査している。しかし、これら

の調査は、すべての作品について初出本文を使用しているわけではない。明治～昭和戦前期の作品では、「全然」という文字列に「まるで」「すつかり」「さつぱり」などの和語が振り仮名として当てられている場合がままある。同じ用例でも、テキストによって振り仮名があったりなかったり(さらに、振り仮名が違っていたり)というケースも珍しくない。

そこで今回は、発行当時の原紙面の姿を見ることができる新聞記事データベースを利用して明治末～昭和戦前期の新聞記事から“全然”^{ぜんぜん}の確例を採集・分類し、現在の新聞記事における調査結果と比較して分析・考察を行った。

2. 調査対象

本稿では、以下の2種類のデータベースを用い、新聞記事を調査した。引用に際しては、漢字字体は現行のものに直し、振り仮名は省いた。{ } で囲んだのは、読解のために筆者が補った部分である。用例中の下線はすべて筆者による。

○明治末～昭和戦前期

1910～43(明治43～昭和18)年の経済関係記事を収録した神戸大学付属図書館デジタルアーカイブ『デジタル新聞記事文庫』(詳しい説明は新野(2009)に譲る)を利用して、同期間の『東京日日新聞』・『読売新聞』(以下「東京」「読売」とす

る)の記事を2010年8月12日に検索した。以下「戦前資料」とする。

○現在

『朝日新聞』・『毎日新聞』(以下「朝日」「毎日」とする)の記事データベース(『聞蔵Ⅱビジュアル』・『毎日 News パック』)を利用し、2007年の記事を検索した。検索対象は縮刷版での紙面の確認が可能な東京(本社)版の記事に限定し、地方版・地域面の記事は対象から除いた。朝刊の場合は特記せず、夕刊の場合のみそれを示した。著作権等の関係から、当該期間中のすべての記事が検索対象になっているわけではない。以下「現在資料」とする。

3. 分類の基準

“全然”は「否定を伴う」「否定と呼応する」のが規範の用法である、と常に言われてきた。しかし、その場合の「否定」とは“ない”(形容詞・助動詞)・“ず”だけなのか、“無理”・“違う”・“駄目”のような形の上では肯定でも意味は否定的あるいはマイナス(この違いについては後述)の語も含むのか、さらに含むとすればどこまで含むのか、という点が明確でない場合が多い。

本稿では、以下のA～Cに当てはまる語を伴う例を「否定を伴う例」とし、それ以外の語を伴う例を「肯定を伴う例」と定義する。

A 形容詞 “ない(ねえ)”

B 否定の助動詞 “ない(ねえ)”・“ず(ん)”

C 形容詞 “ない”の派生語(動詞 “なくす”・“なくなる”)

そして、このような規範の用法に近いと判断した順に、以下のD～Hの分類を設けた。これは新野(1997)で示した分

類基準を一部変更したものである¹⁾。語例とともに示す。

D 否定の意の接頭辞として使われる漢字を含む語

“不可能” “無理” “未決” “没交渉” など

E 二つ以上の事物の差異を表す語

“反対” “別” “違う” “異なる” など

F 否定的な意味の語

“廃止” “停止” “解消” “取り除く” など

G マイナスの価値評価を表す語

“駄目” “失敗” “虚報” “的外れ” など

H 上記以外の、否定・マイナスの要素がない語

(例は後掲)

D～Gは、その語自体に何らかの形で否定あるいはマイナスの要素が含まれたものである。Dは否定の意の漢字一字を含むという形態面である。E～Gはその語の意味面に注目している(Eの「差異を表す」というのも一般に使われる広い意味では「否定」に含まれる)。

このうちFとGの区別はやや分かりにくいかもしれない。Fの場合、“廃止” “停止” “解消”は、いずれも<ある事物や状況を受容しない、継続させないこと>を表しているという点で、否定的な意味を持っている。しかし、否定される対象が好ましくないものである場合、例えば「彼の不安は解消した」というのは、「彼」にとってはプラスである。従って、語自体はプラスかマイナスかいずれかの価値評価に関わるものではなく、ニュートラルといえる。それに対してGの場合、例えば「彼の〇〇は駄目だ」「彼は〇〇に失敗した」というのは「彼」にとってプラスではあり得ない。したがってこれらの語は、それ自体がマイナスの価値評価を

表1 「戦前資料」の調査結果

		Ⅰ期 1910～18		Ⅱ期 1919～27		Ⅲ期 1928～36		Ⅳ期 1937～43		通算	
		用例数	全体比	用例数	全体比	用例数	全体比	用例数	全体比	用例数	全体比
否定を伴う例	A 形容詞 “ない(ねえ)”	15	4.20	22	6.06	11	11.46	7	6.67	55	5.98
	B 助動詞 “ない(ねえ)”・ “ず(ん)”	46	12.89	46	12.67	23	23.96	43	40.95	158	17.19
	C 動詞 “なくなる” “なく す”	0	0.00	4	1.10	1	1.04	1	0.95	6	0.65
	小計	61	17.09	72	19.83	35	36.46	51	48.57	219	23.83
肯定を伴う例	D 否定の意の接頭辞と して使われる漢字を 含む語	53	14.85	30	8.26	11	11.46	11	10.48	105	11.43
	E 二つ以上の事物の差 異を表す語	38	10.65	57	15.70	12	12.50	12	11.43	119	12.95
	F 否定的な意味の語	93	26.05	98	27.00	18	18.75	15	14.29	224	24.37
	G マイナスの価値評価 を表す語	44	12.32	41	11.29	7	7.29	5	4.76	97	10.55
	H 否定・マイナスの要 素のない語	68	19.05	63	17.36	11	11.46	11	10.48	153	16.65
	小計	296	82.91	289	79.61	61	63.54	54	51.43	698	75.95
不明		0	0.00	2	0.55	0	0.00	0	0.00	2	0.22
計		357	100.00	363	100.00	96	100.00	105	100.00	919	100.00

表2 「現在資料」の調査結果

		朝日	毎日	計	
				用例数	全体比
否定を伴う例	A 形容詞 “ない(ねえ)”	44	42	86	13.37
	B 助動詞 “ない(ねえ)”・ “ず(ん)”	189	118	307	47.74
	C 動詞 “なくなる” “な くす”	0	0	0	0.00
	小計	233	160	393	61.12
肯定を伴う例	D 否定の意の接頭辞と して使われる漢字を 含む語	0	0	0	0.00
	E 二つ以上の事物の差 異を表す語	96	71	167	25.97
	F 否定的な意味の語	0	1	1	0.16
	G マイナスの価値評価 を表す語	16	14	30	4.67
	H 否定・マイナスの要 素のない語	17	9	26	4.04
	小計	129	95	224	34.84
	呼応部分省略	9	3	12	1.87
	～です	3	2	5	0.78
	過去の文章の例	4	2	6	0.93
	この語の用法自体が話 題	0	3	3	0.47
計		378	265	643	100.00

表している、と判断できる。

今日「全然」は否定を伴う副詞であると言われながらも、「全然違う」や「全然駄目」は「間違った日本語」として批判されることはない。それはこれらが形態的には肯定であるが、意味の面で否定やマイナスの要素があるからである。それに対し、そのような否定・マイナスの要素を含まない語がHである。その例は第6章で示す。

4. 調査結果と分析①—概観

二つのデータベースから採集した“全然”の用例を、前章で示した基準に基づき、被修飾語によって分類した。

まず、「戦前資料」では、「全然」という文字列が「東京」では863例、「読売」では260例あった。そのうち「全然」・「ぜんぜん」・「全然」という振り仮名があって「ぜんぜん」と読むのが確実な例を今回の対象とした。「東京」では711例、「読売」で207例の計918例である²⁾。なお「全然の」などの副詞ではない例は除いた。

そして調査期間を4期に分けて示した結果が前頁の表1である。各期の数値は左側が用例数、右側がその全体比(%)である。「不明」とは、紙面の欠損や汚れ等のため、被修飾語が何か判定できない例である。

今日の規範的用法である、否定を伴う例の比率が、Ⅰ・Ⅱ期は10%台後半であったものがⅢ期で30%台後半、Ⅳ期になると40%台後半と急増している。特にB「助動詞“ない(ねえ)”・“ず(ん)”」の伸びが顕著である。一方F・G・HはⅠ期からⅡ期にかけては横ばいであるが、その後は大きく比率が落ちている。

一方「現在資料」ではどうか。表記別にみると、「朝日」では「全然」が332件の記事から345例、「ぜんぜん」が31件の記事から32例、「ゼンゼン」が1件の記事に1例の合計378例が、「毎日」では「全然」が254件の記事から260例、「ぜんぜん」が5件の記事から5例、合計で265例が得られた。総計643例の内訳は表2の通りである³⁾。

Bが最も多く全体の50%近くを占め、ついでEが全体の4分の1、A「形容詞“ない(ねえ)”」がさらにその約2分の1で続いている。

「戦前資料」では、通算でFが最も多く全体の約4分の1に達し、次いでB、Hの順であるのとは大きく異なっている。さらにこれら上位3者合計の全体比が、「戦前資料」では50%台なのに対し、「現在資料」では90%近くに達しているのも目立つ差異である。

また、「戦前資料」では約10%の比率があったD・Gが、後に見る「全然だめ」を除けばゼロかそれに近い状況である。

では次章以降で、肯定を伴うD～Hの例について、両者の結果を比較しつつさらに細かく見ていく。

5. 調査結果と分析②—D～Gについて

まずD「否定の意の接頭辞として使われる漢字を含む語」は、「戦前資料」には105例中「不可能」が21例と最も多く、次いで「無視」8例、「没交渉」6例、「不明」・「無用」各4例となっている(同じ語が名詞とサ変動詞の語幹の両方で現れた場合や、文語・口語の両形が現れた場合は1語として計算。以下も同じ)。

[1] 国家としても寧ろ家内工業を奨励してある現在に於て、家内工業禁止は全然不可能なことだらうが、

(読売 1919.4.1)

[2] 職工自身が其組合の幹部の職権を全然無視して勝手にストライキをやつたものである。(東京 1919.4.13)

[3] 昨年四月迄は金融界の状勢と全然没交渉の態度を執りて公定利子を据置きたりしが(東京 1917.3.17)

一方「現在資料」には 1 例も見られない。新野(1997)に掲載した例も

[4] 暗い世相のなか唯一の救いが野茂の快投だったともいえるけど、僕は何か全然無関係なんだという気がした。

(えのきどいろう「さよならの人たち」『Number』1996.1.4 号。p.73)
など 3 例にとどまる。

E「二つ以上の事物の差異を表す語」はいずれにおいても上位に入っているが、その内訳は大きく異なる。「現在資料」では「全然違う」の例が

[5] 役員報酬は、いつを基準にして見るかで全然違う。01 年あたりを基準にしても無意味だ。あこのころの役員賞与はゼロだった。(毎日 1.24)

[6] 「日本の中心、東京を見たことがあるかで就職する時に全然違う」(朝日 3.24 夕)

など全 167 例中 163 例を占め、全用例の約 4 分の 1 に達しているのに対し、「戦前資料」では確例は「東京」に

[7] ジャバの占領地行政は満洲や支那とは全然違ふ、(東京 1942.5.10)

など 4 例しかない⁴⁾。代わりに、“異にす(る)” 37 例、“異なる” 18 例、“別個(別

箇)” 15 例といったところが上位に入っている。

[8] 謂う所は国家に対する血税云々にして全然目的を異にす(読売 1919.2.4)

[9] 然るに政府の食糧政策は全然異なる方針を示し(東京 1918.8.13)

[10] 更に之を發展せしめんとせば関税保護以外全然別個の方策に出づるの他なきなり(読売 1920.2.3)

「現在資料」では、他に「全然別」「全然変わる」が

[11] 「政府は拉致が第一、核は第二といった具合に順番をつけているが、それ自体がおかしい。全然別の問題ですから」

(朝日 3.9)

[12] 一人暮らしも始めて自分の行動に責任を感じるようになったし、仕事に關しての気持ちも全然変わりました。

(毎日 6.15 夕)

など 2 例ずつ見られる。

F「否定的な意味の語」でも、両者の差異が大きく現れている。「戦前資料」では通算で 1 位に立っているのに対し、「現在資料」では

[13] 「個人の記録は全然どうでもいい。ドジャースが勝つ方がいい」

(毎日 4.29)

が 1 例あるのみであった。

さらに「戦前資料」では全 224 例中上位の語は“杜絶す(る)” 12 例、“欠く”・“中止す(る)”・“廃止す(る)”各 8 例、“失う”・“破壊す(る)”各 7 例となっており、特定の語に集中はしていない。1～2 例の語が大部分である。

[14] 日本に対する羊毛の輸出は、全然杜絶せざる迄も、大に減少を見るべきこ

と明かなり。(東京 1941.5.28)
[15]この点についてわが国は全然今日まで考慮を欠いておつた

(読売 1914.9.17)
[16]戦争の継続する間は、輸出貿易は全然中止の状態たるべきのみならず、
(読売 1914.9.17)
[17]市たるもの宜しく彼等の人格を尊重し、精神的差別待遇は全然之を廃止し
(東京 1919.12.22)

G「マイナスの価値評価を表す語」においても、状況はやはり大きく異なる。

「現在資料」では「駄目」が
[18]藤原監督は「後半は全然だめ」とおかんむり。(毎日 1.3)

[19]「全然ダメですね。課題はまだいっぱいあります」(朝日 5.26)

など 30 例中 26 例を数えるが、「戦前資料」には 1 例もない。全 97 例中「失敗(する)」が 10 例と最も多く、「裏切る」「誤解(する)」が 5 例で続く。F 同様 1 ～ 2 例の語が大部分である。

[20]戦時中英国政府の行ひたる船舶取締は全然失敗に終れり(読売 1918.6.29)

[21]今度の対戦に於ける政府鉄道管理の経験は彼等の希望を全然裏切つてしまつた
(東京 1920.1.13)

[22]新借款団が成立せば石井ランシング協約の効力が薄弱となるべしとの説は全然誤解にして
(東京 1919.5.29)

「現在資料」では「駄目」の他に「的外れ」「外している」「悪い」各 1 例があり、さらに

[23]「安倍さんは新しい保守と言うけど、今回の反応なんか見ると、全然オールドですよ」

とファクラーさんは繰り返した。
(毎日 2.13 夕)
という外来語を修飾した例が、外国人の発言の中に見られる。

6. 調査結果と分析③—H について

そして、今日もっとも強く「誤用」視される、H「否定・マイナスの要素のない語」である。

冒頭に述べたとおり、「今日は肯定を伴う用法は「誤用」視されるが、明治から昭和戦前期にかけては、否定をも肯定をも伴って用いられていた」ということは、今日の日本語研究者にとっては常識となっている。しかし、「同じ肯定を伴う場合でも、当時と今日とでは、“全然”の意味が異なる」という論が以前は有力であった。代表的なものとしては、若田部(1993:182)の次の記述がある。

・漱石にしても、谷崎にしても、上記の例 {=「一体生徒が全然悪いです」(『坊っちゃん』)・「執れを使つても全然同じである」(『文章読本』)} で分るように「全然」を「すべて」の意味で使っているのである。現代の俗な用法と言われているような「とても、非常に」の意味で使っている訳ではない。

それに対し、筆者は新野(1997:278)で、明治～昭和戦前期と今日(1994～1996年)の実例を調査した結果に基づき、

・昭和戦前までも現代でも、肯定と呼応する“全然”は(否定と呼応する場合と同じく)＜完全に、百パーセント＞の意で基本的に変わっていない。

と述べた。本稿でもその立場に立って論じていく。

まず、「現在資料」では、全 26 例中「全

然大丈夫」が8例と最も多いが、このうち5例は2008年1月公開の映画の題名として現れたもので、それ以外は

[24] 15日間の故障者リストに入ったヤンキースの松井秀は〔中略〕練習には参加せず、ほとんど治療に専念したが、「全然大丈夫。若干よくなってるんじゃない」と、明るい表情で球場を出た。

(朝日 4.10 夕)

[25] さらにレベルを上げるため、昨夏、米国ロサンゼルス郊外に拠点を移した。

「はじめは英語も話せないし、不安だなあとと思った。けど、意外に食べ物にも困らないし、英語もジェスチャーで分かるし、全然大丈夫でした」

(朝日 4.17)

など3例である。さらに「全然平気」が
[26] 8000億ドルの経常赤字を抱えながら、貯蓄率はマイナス。こんな状態が続くはずないというのが経済学の常識なのに、〔米国経済は〕全然平気だ。

(毎日 1.1)

[27] 20代のころは睡眠3時間の日が続いても「全然平気だった」と言う金井亜佐子さん。

(毎日 4.28)

など4例、「全然OK」が

[28] 昼食を終えて、野口が滞在している〔中国の〕ホテルのロビーに現れた。「こっちの料理で全然OK。手羽先とか空揚げ系が好きですね」(朝日 11.10)の1例見られる。

これらは相手あるいは自分の心中の前提([24]での故障に対する相手の懸念や、[25]での渡米時点での自らの不安)や、社会通念として存在する前提([26]での「こんな状態が続くはずない」、[27]での

「睡眠3時間の日が続いて」はもたないだろうという常識に基づく判断、[28]での中国の食事はなかなか日本人の口に合わないという一般的な認識)を完全に否定する表現である。

それ以外では「[□□の方が(○○より、○○と比べたら etc.)全然××]」のような比較表現が

[29] 「塾に通うと小中9年間で720万円かかる。お子さん3人で使えるのだから、うちのソフトを買った方が全然安いですよ」

(朝日 4.10)

[30] 内藤戦に向けて「パンチ力はおれの方が全然ある。力でねじ伏せるだけ」と豪語。

(毎日 8.17)

など6例見られる。尾谷(2008:107)では、
・比較表現は、一方を上位に置けば他方は必然的に下位になるので、暗黙のうちに否定のニュアンスを含む。そのため「全然」の使用が自然になる。

とする。「自然になる」とまで言えるかどうかはともかく、[29]「(塾に通うのではなく)うちのソフトを買った方が明らかに安い」・[30]「(内藤ではなく)おれの方が間違いなくある」と、比較の対象を否定しているのは明らかである。

それ以外の「現在資料」のHの例でも、何らかの前提となるような事柄を否定する場合に使われているのがわかる。

[31] もっと遊ばないと、とか、甘えていいのに、とか言われるんですが、全然遊んでいるし、甘えてます。

(毎日 8.17 夕)

[32] 「かっかするなよ」と言う落合監督に対し、「全然冷静だった」という谷繁。

(朝日 10.21)

これらの例も、自分に対する他人の発

言の内容という前提に対する、「そんなことはなく、完全に」という否定である。そしてこれらは否定される前提が文中に明示されているが、そうでない例もある。

[33] 翌年、{サッカー J1} 名古屋に移籍。

日本代表 GK 檜崎に挑んだ。結局、足踏みを強いられた。{中略}新天地で背番号1を用意された。「守備のリーダーになり得る」と期待がかかる。向上心を捨てなかった男が意気に感じないわけがない。「全然、充実してます」と表情が明るい。(朝日 2.15 夕)

「(名古屋では)足踏みを強いられた」という記述から、当時の心境として「充実していなかった」ことが容易に推測され、その明示されてはいない前提となる事柄を否定する形で、「(新天地では期待されているので、名古屋時代のような「充実していない」ということは全くなく)100%充実してます」という状況を表現するのに使われている。

また、これら H の 26 例から映画題名の「全然大丈夫」5 例を除いた 21 例中、小説の地の文中の「全然平気」1 例以外はすべて会話文(座談会・討論記事中の発言部分を含む)に現れている。さらにそのうち 14 例はスポーツ関係の記事に現れている。

新聞用語懇談会編『新聞用語集 2007 年版』(2007、日本新聞協会)では、「用字用語集 誤りやすい慣用語句」のなかに「全然(いい)」という項目があり、次のように書かれている。

- ・「全然面白くない」「全然問題外」など、下に打ち消しの形または否定的な語を伴う場合に使う。「全然いい」など肯定的な使い方は避ける。(p.338)

しかし、会話文は地の文と比べると、臨場感を出すため発言を忠実に再現しようとする結果、用語に関する校閲は比較的緩い観があり、スポーツ関係の記事は特にその傾向が強い。そのことが、このような H の例の現れ方につながっている。

今日における、肯定を伴う“全然”が、何らかの前提となる事柄を否定するような文脈で使われることは、すでに足立(1990)をはじめ、いくつかの先行文献で指摘されており、今回もそれを裏付ける結果となった。

それに対し「戦前資料」ではどうか。筆者は新野(1997:282)で、

- ・現代はかなり多い「全然平気／大丈夫」、さらに「～の方が(～より)全然○ ○」といった比較の例は昭和戦前までには全くない。

と述べたが、今回の調査でも同じ結果であった。

これ以外のタイプの例では、何らかの前提となる事柄を否定して使われた、今日同様の例もある。

[34] 併し此船主側からの要求額の査定方法には二つあつて即ち政府と船舶業者との協定に依るか乃至は全然政府の命令とするかであるが、之に就てはどうなるか未だ疑問である。

(東京 1921.4.7)

[35] 「日本の養殖真珠は天然真珠とものが違ふ」といふ悪宣伝が放たれ、パリで裁判沙汰にまでなつたが、今では世界中の生物学者によつて養殖真珠も天然真珠も全然品質の同じなことが証明されてゐる。(東京 1932.4.26)

〔34〕では「政府と船舶業者との協定に依る」、〔35〕では「『日本の養殖真珠は天然真珠とものが違ふ』という悪宣伝」という文中に明示された前提が否定されている。

しかし、それに加え、次のような、何らかの前提を否定するわけではなく、単に「完全に、100%」の意で用いられた例も多く見られる。〔37〕はなにも前提のない、記事の冒頭である。

〔36〕露都の革命劇中に於てアレキサンドラ廢後の演じた役割は全然仏蘭西革命史に於けるマリア・アントワネットである。 (読売 1917.12.16)

〔37〕三池港は、三井鉱山会社の独力経営により、全然人為的に築造されたもので、 (東京 1933.4.17)
これは今日の H の例との大きな違いである。

今日 H の例は、一般に言われる、「“全然”は否定を伴うべき副詞である」という規範意識(これに「本来」が加わると「迷信」になる)に背いているとみなされている。しかし、見てきたように、語自体の意味は否定的(“全然”の被修飾語について一般に使われる「否定(的)」は、多くの場合、本稿で使ってきた「否定」と「マイナス」を併せた広い概念である)でなくても、文脈の中での何らかの前提を否定して用いられている。結局、「現在資料」の“全然”は、A～C に D を加えた形式レベル、E～G のような語の意味レベル、H のような文脈レベルのいずれかのレベルで必ず「否定」(広義)を伴っていると考えるのである。

7. おわりに

以上見てきたように、D～H のいずれにおいても、「戦前資料」と「現在資料」とでは大きく様相が違うことが明らかになった。今日の“全然”は明治末～昭和戦前期と比べて、単に「否定を伴うようになった」というにとどまらず、被修飾語のパリエーションがきわめて乏しくなっているということがわかる。

ただ「戦前資料」においては、時代が下るほど「現在資料」の姿に近づいてくる。これはある意味当然の結果ともいえるが、それが数字の上で明らかになった意義は大きい。

しかし、“全然”を通時的に見ていくうえで、残された最大の問題がある。

・「“全然”は本来否定を伴うべき副詞である」という「迷信」はなぜどのように発生し、定着したのか。

がそれであり、いまだ決定的な説は示されていない。

今後も引き続きこの語に注目していきたい。

注

1) 新野(1997)では、G と H の間に、「単独ではマイナス評価とはいえないが、用例中では話者にとりマイナスの状況や非難の意を表している語」という分類を設定した。その例は次のようなものである。

・●智ノ花 若乃花に完敗を喫し照れ笑い。{中略}「悔しいけど、向こうは全然余裕持ってるね。来るなら来いって感じ」と肩をおとしていた。

(『スポーツニッポン』1995.1.9)

しかし、今回はこの分類を廃し、Hに統合した。被修飾語による分類である以上、同じ語が場面や文脈により違う分類に属する、というのは趣旨にそぐわないと判断したためである。

- 2) 「ぜんぜん」以外の振り仮名がある「全然」という文字列の例は、「全然」(東京1913.8)・「^{まるで}全然」(読売1920.1)の計2例しかない。
- 3) 表2のB「助動詞“ない(ねえ)”・“ず(ん)”」には、近畿方言の“あかん”1例を含む。
- 4) ただし、「東京」に「全然異つた二つの階級」(1939.6)、「読売」に「全然設備等が異つてゐるもの」(1938.9)と、「異つた(て)」に振り仮名のない例が見られる。「戦前資料」には「^{ことな}異る」の例に加え、“ちがう”に「^{ちが}異」の字を用いた「異ふ」の例が「東京」「読売」に3例ずつある。ところが「^{かは}異つて」という振り仮名の例もある。結局、問題の2例の読みは「ことな(て)」、「ちが(て)」、「かわ(て)」と3通りの可能性があることになる。

参考文献

- 足立広子(1990)「副詞「全然」の用法について」『南山国文論集』14:pp.37-46. 南山大学国語学国文学会
- 岡崎晃一(2008)「「全然」考」『親和国文』43:pp.左1-21. 神戸親和女子大学国語国文学会
- 尾谷昌則(2006)「構文の確立と語用論的強化—「全然～ない」の例を中心に」『日本語用論学会大会研究発表論文集』2:pp.17-24. 日本語用論学会
- 尾谷昌則(2008)「アマルガム構文として

の『「全然」+肯定』に関する語用論的分析」児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集』pp.103-115. ひつじ書房

新野直哉(1997)「「全然」+肯定」について」佐藤喜代治編『国語論究6 近代語の研究』pp.258-286. 明治書院

新野直哉(2009)「“万端”の《気づかない変化》について—今日と明治～昭和戦前の意味・用法」『国語学研究』48:pp.1-15. 東北大学文学部「国語学研究」刊行会

若田部明(1993)「「全然」の語誌的研究Ⅱ」多々良鎮男先生傘寿記念論文集刊行会編刊『多々良鎮男先生傘寿記念論文集』pp.184-173.

(国立国語研究所)